日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所　地方会ニュース編集事務局
〒　470－1192
愛知県豊明市沓掛町田楽ヶ窪1－98
藤田保健衛生大学医学部公衆衛生
電話（0562）93－2453
FAX　（0562）93－3079
発行責任者　竹内康浩・鳥　正吾
http://www2.justnet.ne.jp/~jsoh-tokai

（題字　皿井　進筆）

腰痛予防の姿勢点や腓骨神経麻痺予防の下肢点のcheckからaction（生産技術的対応）が生まれた
－自動車組立ラインに開発された**らくらく作業シート**－1992年

21世紀の労働衛生　－私の歩んだ道から－

入谷　辰男（元　トヨタ自動車K.K.　産業医）

昨年、労働衛生10月号に、全国労働衛生週間50周年記念“半世紀を振り返って”の作業管理の執筆を依頼され、改めて私の人生を振り返ってみる機会を得た。

昭和27年に、鯉沼教授の労働衛生学の門をたたき、半世紀を過ごしたことに改めて驚いた。

当時の名大－衛生学教室は現場の調査依頼が多く、けい肺、鉛、有機溶剤、疲労、水質汚濁、大気汚染など、多岐に亘り、現場から得た教訓が多かった。

昭和35年、トヨタ自動車工業K.K.人事部－安全衛生課に入り、QCのplan－do－check－actionの管理手法を徹底的に叩きこまれた。

昭和50年までの作業環境管理とがん対策、昭和63年までの腰痛、ばね指、腓骨神経麻痺などの作業管理と海外派遣医療不安対策、平成に入り、トヨタ記念病院－健診センターの創設に伴なう成人病対策を中心とした健康管理など、夫々の時代の要請に伴って、医学、工学各界の良き師に恵まれ、充実した人生を送ることができた。

70才を過ぎ、中小企業の衛生管理に若干、関与し、余生を送りつつあるが、トヨタ式の仕事の進め方が万能でなく、夫々の企業に“氏より育ち”という様な文化のあることも知った。

私の過ごした半世紀は、高度経済成長の波にのった第2次産業中心の時代であり、労働衛生関連の法規も次々に生まれ、医学と衛生工学や人間工学との連繋により、労働衛生成熟化の時代であった。

作業環境管理、作業管理、健康管理の3管理と教育、安全衛生管理体制の充実という衛生管理の基本理念の定着した時代でもあり、事業者の管理責任という旗印の下に、各企業に浸透した。

平成の時代に入り、健康管理中心の産業保健活動の強化が主題となり、事業者の管理責任がうすれ、個人の健康管理責任が強くなりつつある。

更に、少子高齢化に伴う老人保健問題が浮上した。

作業環境問題も地球環境問題に移りつつある。

職業病中心の20世紀の労働衛生も、老人保健に結びつく産業保健や遺伝子の応用が問われる時代となろう。

若きリーダーの活躍を期待している。

平成11年度東海地方会学会を担当して

竹内　康浩（名大・医・衛生）

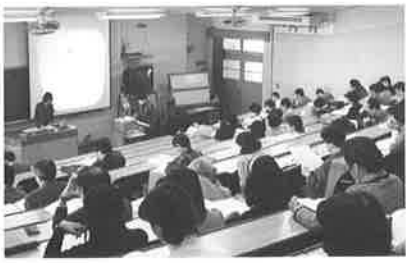
平成11年度日本産業衛生学会東海地方会学会は平成11年11月6日（土）に名古屋大学医学部講義室で開催された。参加者は204名と盛会であった。

一般演題は24題で、午前中に2つの講義室を使用して、発表討論が行われた。当学会は従来から会員の研究活動の成果の発表の場として一般演題を重視してきた。今回の発表も時代の要請を反映した質の高い発表が多く、討論も活発に行われた。以前には1会場で一般発表が行われた歴史が長く、参加者全員が1会場で発表や討論に参加できたが、最近は演題も多くなり、優れた特別企画もとり入れられ、一般演題の発表が2会場になったために、半分しか参加できないのが残念である。

午後は特別企画として、特別講演は「介護と労働衛生の課題」と題して小野雄一郎先生（藤田保健衛生大学公衆衛生学教授）に講演していただいた。わが国では平成12年からはじめて介護保険制度が導入されることになり、介護に従事する労働者の数も大幅に増加することが予測される。しかし、介護に携わる人達の労働負担についての研究やそれに対する健康保護に関する配慮が遅れている現状から見て、小野先生の講演は時宜に適したものであった。そのために、会員の関心も高く、参加者に課題の重要さと産業衛生従事者の今後の取り組みについて多くの示唆を与えた。シンポジウムは「労働者の自殺の現状と課題」のテーマで、司会は小林章雄先生（愛知医科大学衛生学教授）、話題提供は、1.労働者の自殺の現状と労災認定の動向、黒木宣夫先生（東邦大学佐倉病院精神科助教授）、2.職場でのメンタルヘルス対策と自殺予防、山本克英先生（アイシン精機㈱安全衛生部）、3.職場における自殺対策の今後の展望、藤田定先生（愛知教育大学保健管理センター助教授）であった。最近の経済不況、リストラ、情報技術革命、失業の増加などの社会的な背景から、労働者の自殺は激増し、自殺の労災申請件数も急増している。労働省はそれに対して、平成11年9月に「心理的負荷による精神障害等に係わる業務上外の判断指針」を策定し、都道府県労働基準局長に通達した。これは従来の労災認定が極めて稀であった認定基準を改定したもので、産業衛生の分野の関係者にも大きな関心を呼んだ。各先生からそれぞれの経験を踏まえた具体的な話題として、業務上外の判断指針策定の背景と経過、企業におけるメンタルヘルス活動の結果による自殺予防、米国と比較したわが国の職場の自殺の現状と対応の特徴と自殺予防の展望等が話され、最近の労働者の自殺問題に関する参加者の理解を大いに助けるものであった。

学会の準備にあたっては演題募集、プログラムの配布に加えて、ポスターの作成、インターネットのホームページでの広報など関心のある方に広く宣伝することに努めました。今年は特別企画のテーマ等に関心が高く、学会開催前から事務局に多くの問い合わせがあり、参加者が多くなることが期待されました。

会場は大学の古い講義室であり、医学部の構内は工事中であり、出席者には何かと不便をおかけしたと存じます。しかし、特別講演とシンポジウムが行われた第4講義室はほぼ満員で、講義室にこれほど沢山の人が入ったのを見たのは久しぶりでした。休憩時にはロビーにも人があふれ、会員の交流が活発に行われました。幸い好天に恵まれたこと、質の高い一般演題の発表が多かったこと、時宜に適し特別講演とシンポジウムのテーマと優れた講師やシンポジストが得られたこと等に加えて、日医認定産業医研修3単位、産業看護職継続教育システム実力アップコース3単位が認められたこともあって多くの参加者が得られ、盛会で実りある学会になったものと感謝しております。



一般演題発表

特別講演　小野雄一郎先生

シンポジウム

第41回　産業精神衛生研究会・第47回　職場精神衛生研究会

会　期：平成12年3月3日（金）　9時20分～16時30分
会　場：ルブラ王山（名古屋市千種区覚王山通り8-18）
内　容：
教育講演
1.「職場のメンタルヘルスにおける守秘義務と安全配慮義務」
　福渡　靖（山野美容芸術短期大学　教授）
2.「職場のメンタルヘルスにおけるPersonality Disorderへの対応と配慮」
　藤田　　定（愛知教育大学　助教授）
3.「職場における精神障害等の新しい労災判断指針について」
　只野　　祐（労働省労働基準局補償課）
基調講演　「産業経済変革期におけるストレス・マネージメント」
　永田　頌史（産業医科大学　教授）
シンポジウム　「職場のストレス対策―今後の展望―」
　座長：夏目　誠（大阪府立こころの健康総合センター部長）
　　川上憲人（岐阜大学医学部助教授）
1.「職場ストレス対策のありかた」
　川上憲人（岐阜大学医学部助教授）
2.「事業所における総合的ストレス対策の可能性」
　深澤健二（ソニー㈱健康開発センター）
3.「事業所外サービス機関の役割」
　長見まき子（あけぼの会メンタルヘルスセンター）
4.「リストラ・アウトソーシング下でのストレス対策」
　渡辺直登（慶應義塾大学教授）
参加費：5000円
問合せ先：愛知医科大学　衛生学教室（担当　坪井）
　TEL：0561-62-3311（内線2312）　FAX：0561-63-8552

新春随想

生活習慣

大杉　茂樹（デンソー）

生活習慣を変えるには余程の決意が必要と思われています。医師になって以来臨床医であった頃は朝食はほとんど摂らず、朝起きて慌ただしく車で出勤し、病院内を駆けずり回ってはいたものの日常的には殆ど歩くこともなく、帰宅や夕食は遅くまた不規則で、油っこい夜食を院内でもしばしば摂り、始終疲れたと言い、積極的には体を動かすこともせず、忙しさをいいわけに自分のことをよそにして患者さんに対しては病気療養のためには生活を変えることが重要ですとさも簡単なことのように説明していました。さして自分自身に健康不安があったわけでもなく、なんの抵抗もなく我が習慣に馴染んでおり、あたかも朝目覚めれば打って変わって健康的な生活ができるかのごとく構え高を括っていました。今からおよそ5年前思いがけなく専属産業医となり、仕事も生活も一変させる機会が訪れました。職場がやや遠くなって通勤時間が長くなりました。通勤は徒歩に電車となり、起床時間は約一時間早まりました。今まで体がなまっていたためと不慣れな仕事環境のため異常に疲れ帰宅後はやばやと眠ってしまうことが続きました。半年程経ってようやく生活リズムが慣れてくると自然と朝食をしっかり摂るようにもなり、出勤後ウォームアップのためストレッチとラジオ体操をし、勤務が終わればだらだらと職場に居ることはせず早く帰宅し、外出する時も多少時間が余分にかかっても歩くことが不思議と苦にならなくなってきました。学生時代の習慣が20年振りに戻ってきたわけです。

半ば強制的に生活環境を変えることでもしなければ、自分の意思だけではなかなか生活習慣なんて変えることなんてできやしないと最近では納得してしまっています。急患に追い立てられ、せっかちであった以前と比較して、じっくりと時間をかけ診療や保健指導する現在はじれったさも感じます。しかし自分自身をふりかえり、本来健常で普通に勤務しているのであればこそ生活習慣やリズムを変える気にもならないのは仕方ないことなので、むしろ職場環境や労働環境をじっくりみつめながら健康管理に精を尽くしていこうかと思っています。

産業医として

藤澤正義（アイシン精機）

新年あけましておめでとうございます。アイシン精機株式会社専属産業医の藤澤正義と申します。私は1984年に藤田保健衛生大学医学部を卒業しました。卒業後数年目より、今の職場の診療所の医師兼産業医として、週に2～3日勤務しておりましたが、卒後15年目を迎え、専属産業医となりました。

当社は、刈谷市に本社を持つ、社員数1万名を越える企業ですが、主に愛知県を中心とした分散事業所形態をとっております。私の仕事の中心は、この1万名を越える社員の健康管理ということになるのですが、臨床医的な考え方しかできなかった私にとって、なにから手をつけていいか迷っておりました。幸い、母校の先輩であられる吉田勉先生をはじめとする諸先輩方にいろいろご指導いただき、何とか産業医として、再出発できたところです。

日本はかってない早さで、少子高齢化社会を迎えようとしています。従って、今後の社員の健康管理は、将来に向けた元気な高齢労働者をつくるようなものにしなくてはならないと考えております。それと同時に、職場環境の改善（バリアフリー化、自動化、機械化等）、主に女性労働者に対する社会的システムの改善（託児所の整備、ベビーシッターの採用等）さらには、より多くの外国人労働者の受け入れなどが必要でしょう。

これらのことを考えあわせますと、今後産業医は、安全健康環境管理等ばかりでなく、会社もっと言えば社会全体を考えたシステム作りに対して努力していく必要性を痛感しているところです。今後ともご指導ご鞭撻のほどをよろしくお願い申し上げます。

過労シ（歯）

金山　敏治（岡崎労働衛生コンサルタント事務所）

1996年の労働省通達［歯周疾患健診が事業所において実施されることが望ましい］にもかかわらず、健診を主体とした取り組みではコストに見合うだけのメリットが企業側に見えにくく広く普及するには至っていません。疲労、ストレスと歯周疾患の関係でよく使われる「疲れから歯肉が腫れた。」といった言葉は医学的には正確さを欠くものですが、案外と疲労とストレスの関係を捕えています。

歯周組織はいくら体力に自信があっても、たえず細菌などに接触し案外弱い組織です。この組織に疲労、ストレスの影響で咀嚼障害の起きる症状を、過労歯と勝手に称しています。昨年は中日ドラゴンズが11年ぶりに優勝しましたが、昭和63年にも郭源治投手の大活躍で優勝しました。しかし過労で日本シリーズでは郭投手の歯は「ガクガクだった。」とコメントがありました。

当時「アジアの大砲」と称された台湾の呂明賜選手を擁し、優勝を争った巨人は、環境と生活習慣の違いからのストレスで、下顎の大臼歯を痛めた呂明賜選手の、ペナントレース中盤からの突然のスランプで、優勝を逸しました。郭、呂両選手とも過労歯発症の時期の違いこそあれ、咀嚼機能だけでなく業務にまで影響を及ぼしました。

今年の中日ドラゴンズ選手の過労歯状態も懸念されます。（連覇をめざす為にも過労歯対策が大切です。）

最近も不況による企業の業績悪化によりリストラが進み、一人で4～5業務の兼務者に過労歯の状況も見受けられます。国民の日常生活における清潔指向の強まりで口腔保健の分野にも関心は高く、各種アンケート調査でも口臭が、う蝕、歯周病に次いで歯科における第3の病気としての地位を固めつつあります。病態と治療法が整理されている真性口臭症に対し心因性口臭症も認知され職場で口臭を気にする自臭症も増加傾向です。2000年の産業保健は過労歯対策もよろしくお願いします。

私導者

山内　秀樹（本田技研　浜松）

新年あけましておめでとうございます。

2000年を迎え、皆さんは如何お過ごしでしょうか。

「コンピュータ2000年問題」（Ｙ２Ｋ）の対応はどうでしょうか。

さて、私が産業医という職業に足を踏み入れたのは、約２年前です。それ以前は病院の中を走り回っていました。また聴診器を持つより、メスの方が肌にあっていると思っていました。それがなぜここにいるのか？これで良かったのか？その答えは、……。あと数年経たないと結論がでないと思います。産業医になってから、本当に動かなくなりました。巡視はしているのですが、どちらかというとデスクワークが多くなりました。これではいけないと思い歩くように努力しているのですが、なかなか実行できません。体力測定は50代のランクになり（本当は30代）、身の危険を感じています。従業員の方には運動を勧めているのに、私がこれでは困ります。身体に良い事はこちらから始め、その必要性を話し合わないと従業員の方は納得しません。本当に大変な所に来てしまいました。

昨今、我々の身近ではいろいろなことが起きています。遺伝子組み換え農作物、環境ホルモン、ダイオキシン、オゾン層破壊など挙げればきりがありません。最近では、東海村臨界事故のような原子力災害でしょうか。今後も予想しえない事が起きると思われます。これら環境問題については、私自身の勉強不足と危機感の低下があり、他人事の感があります。いろいろな物を観て、聴いて、嗅いで、触ってみることが大切です。いろいろな環境の中に自分を置いて、考えなくてはと反省の毎日です。今後は指で指図する『指導者』ではなく、私が先ず動いて導く『私導者』でありたいと思います。

転　機

上村　博幸（岐阜県労働基準協会連合会労働衛生センター）

あけましておめでとうございます。昨年はまさに世紀末、暗いニュースが続いた年でした。今年こそはと期待しています。また、今年は介護保険が導入され、医療保険とのかね合いで福祉と医療の関係がどうなるか、医療の世界は大きく変わる年でもあります。大学を卒業して、昭和50年頃より循環器、特に全国的にまだ始まったばかりの冠動脈造影に没頭し、数千例を行いました。その間にＰＴＣＡ、ＤＣＡ、ＳＴＥＮＴだなどと刺しまくり切りまくった毎日でした。卒業後20年たち、狭心症、心筋梗塞の患者さんをたくさん診ていると、病気になるべくしてなったような人が多く「これからの医療は、感染症は仕方がないにしても、生活習慣病と言われている病気については病気を治すのも大切だけど病気にならないように治療するのがもっと大事なんじゃないかな」と考えるようになりました。それまでは、緊急の患者さんがみえると、はりきって治療に手術に励んでいましたが、本来は病気になる前に手を打ってあげるのが患者さんにとってはより幸せなのではないかと考えるようになりました。そこでこのような考えを実行に移そうとして、4年前に企業健診を行う労働衛生センターに転職しました。臨床的な考え方が身に染みついており健康診断の考え方とギャップがあり当初はかなりとまどいました（基準値が絶対的であり基準を少しでも外れると、再検、要精密検査になってしまうのがどうしても納得行かず）。その人の過去歴、生活習慣などを理解し判定するのが本来の姿でしょうが、その余裕は残念ながらありません。また、労働衛生センターでは健康診断を通して病気予備軍を選び出し、日常生活上の注意事項を指導することも行っています。企業に出向いて健康指導、相談をしていて考えていることは、もっと前向きに健診でチェックされる前に（異常所見を出す前）教育出来ないものか（集団を対象にして本当の意味の一次予防であると思う）思案しているところです。

言葉を買う人達

川出　鈴代（日本トランスシティ）

最近、東京の原宿の路上で、変ったストリートパフォーマンスをやっている男性がテレビで紹介されていた。それは、彼の前に座った人の顔を黙って観て、ただその人に色紙に書いた言葉を送るということなのだが、そこへ座る人（言葉をほしがっている人）の数が引きも切らないという。有料にはなってないようだが、千円札一枚を置いていく人が多いという。彼はカウンセラーでもなく、元、吉本の芸人さんで、お笑いで挫折をし、このストリートパフォーマンスを始めたという。座る人は若い女性が大半で、何度も訪れる人もいるという。中には、書いてもらった途端（言葉をもらった途端）涙を流す女性もいるし、大半の人の顔付きが明るくなっている。言葉をもらったことによって、何かの踏ん切りがついたようにみえる。書かれた言葉は、『○○自信をもって』『○○迷ったら楽しい方へ行け』『○○の秘められた力が眠っている』等々、必ずその中には呼びつけの名前が入っている。今の状態を非難することなく、その人への応援歌を唱いあげているようにみえる。名前が入ることによって、又、顔を見て書かれた言葉であるがゆえに、私だけに向けられた言葉なのだと思え、カタルシスがおこるのかもしれない。

これが、ちょっとした遊びなら良いのだが、どうも言葉を買う人達は真剣にみえる。それだからこそ、なぜ涙を流す場所がここなのか。なぜ自分への暖かい言葉をここに求めてくるのだろうかと思う。

身近な人へ自分の思いを伝えられないのだろうか。それとも身近な人だからこそ伝えられないのだろうか。

座っている若い女性達をみて、ふと中高年の男性サラリーマン達の顔が浮かんだ。彼らは自分達の思いを受け止めてもらえる場所を持っているのだろうか、と。

会員の表彰

藍　綬　褒　章：坂本　　弘（三重産業保健推進センター所長）
労働大臣特別賞：館　　正知（岐阜大学名誉教授）
労働大臣功績賞：中尾　一吉（三重産業医会会長）
労働衛生推進賞：斉藤　俊二（㈱東海健診センター診療所長）

シリーズ　産業衛生に携わって

産業医　奮闘記

有川喜代志（三菱重工業㈱名古屋航空宇宙システム製作所）

日本の航空宇宙産業の中核として長い歴史を持つ当事業所の本拠地（大江工場）で、専属産業医の職務に従事しています。

当事業所はその製品の性格上、大江（管理・研究・設計・工作部門）、小牧南（戦闘機組立部門）、飛島（大型ロケット組立部門）といった3つの工場を有しています。この中枢である大江工場で私が産業医として体験してきた眼で見た産業医像的な話が、「次代の産業医を目指しておられる方々のご参考になれば」という願いを込めて以下に述べさせていただきます。

産業医科大学の卒業生として労働衛生に対する使命感を抱いて入社した憧れの企業、三菱重工業㈱名古屋航空宇宙システム製作所。学生時代から「産業医になるなら好きな航空宇宙産業以外にはない」と決めていたこともあり、夢が現実となった私にとっては最も恵まれた条件の下での勤務が始まりました。

ところが、「航空機の製造に携わる社員の役に立ちたい」という思いだけで経験の浅い産業医が容易にその組織に迎えられるはずもありません。会社のことを何も知らない若輩者が、専門家ぶって産業医の権力をところ構わず振りかざすわけですから、今にして思えば無謀なことをしたものです。大学で教えられたこと（産業医は労働者のためにその知識と権限で労働条件の是正措置は簡単に行えるし、企業も国もそれを頼りにしている。産業医は労働衛生の頂点に君臨している、等々）と現実は大きくかけ離れていました。

当時、正論を主張しても首尾良くことが進まないジレンマの中で、「やりたいことはあるだろうが、5年間は我慢しなさい。そうすれば人もついて来るし、仕事はし易くなるから」という病院長の言葉が私を救ってくれました。以後、産業医としての労働安全衛生法に定められた程度の職務は遂行しつつ、社員との人間的な交流を深める日々が昼夜を問わず始まっていきました。その甲斐あってか、今では「5時まで医者」とかの称号まで授与されています。確かに社員は話しに耳を傾けてくれるし、当時とは逆に事ある毎に人事・労務管理部門からの相談までもが増えているのも事実です。

「産業医は単に数学者や医学者ではなく、労働者と正面から向き合って、その健全な労働意欲を高める手助けをする総合人間学者であるべき」という持論の下、現在は産業医に要求されるバランス感覚の修得に努めつつ、パソコン上で労働衛生3管理を1元化したシステム、さらには優秀な人材と最先端の科学技術が結集した企業に相応しい独自の労働衛生管理体制の構築を目指して奮闘しています。

石川　昭先生を悼む

坂本　　弘（三重産業保健推進センター所長）

10月3日夕刻、先生の訃報に接し、当夜のお通夜に間にあった。掲げられた遺影に合掌していたら、「よう間にあったなァ」という先生のお声がきこえてきたように感じた。

先生は亀山城ご家老の孫としてご出生になり、学習院の高等部を経て三重県立医科大学に入学された。ご生育環境と学習院の学風が反映して、医学部クラス・メートが持ちあわせていない気品を先生は身につけておられた。そんなところから、お殿様というニック・ネームでお呼びしていた。それがまたよく似合っていた。

昭和28年に医学部をご卒業された後、塩浜の産業医学研究所で学位の仕事を終えられ、三菱化成健康管理室にお勤めになられた。先生は所属企業の産業医のお仕事はもとより、産業医をとりまく諸問題に積極的にかかわられた。特に、三重産業医会々長としてのお仕事ぶりは、単なる名誉職ではなく、細かく事務的面まで目配りされ、会務を指揮しておられた。また、日本産衛学会の産業医活動委員会委員として、わが国の産業医像構築に努力された。それに関する先生のご卓見は東海地方会ニュース第28号巻頭言に載っている。

昭和40年代の終り頃、塩ビモノマーの発がん性が注目される契機となったシンポジウムがミラノで開催された時、先生のお供をして参加した。頭より大きくなったネズミの耳下腺腫瘍のスライドを見た瞬間、二人共固唾をのんだ。その晩の夕食の場で、会社への報告に話が進み、単なる参加報告ではなく安衛法第13条－3に基づく勧告書として提出することを先生にご進言申し上げた。帰路機内で、ネズミで確認された限界濃度を人に適用して安全係数をかけると、10～20ppmを当面の管理目標とすべきこと、それが達成できなければ製造中止を決断すべきことを内容とする草稿を書き上げられた。

いま先生は冥土の夜道を一人で歩いてみえます。お供を連れない殿様は絵になりません。「私ももうじき行きますョ。お供いたしますから」をしばしのお別れのご挨拶といたします。

（ありし日の石川　昭先生）

学会・研究会

第1回労働衛生活動評価研究会

巽　あさみ（藤田保衛大・衛・衛看）

初めての労働衛生活動評価研究会が平成11年8月27日（金）、名古屋大学医学部鶴友会館大会議室において午後1時から4時まで42名の参加で開催された。この会は以前の健康度評価研究会に引き続き、発展的な期待を担って設立された経緯がある。目的として、労働衛生活動の評価についての理解を深めること。東海地方会として労働衛生の活動評価のスタンダードの開発等のためにどのレベルで標準化できるのかなどを参加者全員で考えていくことがあげられる。今回は、講演を2題企画し、その後講師の先生方を囲んでフロアーとの意見交換という形で行われた。演題は、武藤孝司先生（順天堂大・医・公衆衛生）の「産業保健プログラムの経済的評価法（費用効果分析、費用効用分析、費用便益分析）」、上村隆元先生（慶応大・医・衛・公衆衛生）の「産業保健・労働衛生の費用と便益（定量的評価に関するアプローチ）」であった。武藤先生からは保健医療プログラムにおける経済的評価について、評価を誰の立場で、誰が評価するか、効果のあるものについて複数のプログラムと比較することの重要性をわかりやすく説明された。また、上村先生からは、実際に研究中の47社を対象とした事例から、調査票の紹介、evidenceは費用と効果を合わせた部分であること。一定のプログラムを実行し、翌年収益が上がったといっても一元的な関係ではないこと。産業保健の範囲としての線引きの難しさを提示された。また、臨床プログラムにおける経済評価は進んでおり、インターフェロンが本当に利くかなどのＥＢＭが華やかであること。産業保健でも今後進めていくため、一緒に研究に参加していただけるよう協力者の呼びかけをされた。意見交換では、現場の産業医から、高脂血症の従業員に健康教育した群としなかった群との比較をされたケースの紹介があり、演者から、一方の介入だけの場合、2つのプログラムの比較とは異なるが、そこから始めて、今後積極的な取り組みが期待されるというコメントをいただいた。

産業保健人間工学会第4回大会

山田　琢之（愛知医大産保科センター）

平成11年11月4日、5日の両日にわたり、産業保健人間工学会第4回大会が名古屋（名古屋市南区㈱トーエネック教育センター）で開催されました。産業保健人間工学会とは、働く人々の健康と安全の確保と、労働生産性の向上との共存を図るための実践人間工学を目指しています。当学会は1991年に産業保健人間工学研究会として発足、1996年に産業保健人間工学会と名称を変更して現在に至りました。産業保健人間工学を具体的に言えば、労働現場で重要な作業管理を科学的に検討し、実践できるものにしていくことであります。今回は過去最大の230名の参加者があり活発な議論が繰り広げられました。大会の内容は、「ワークショップ」「特別講演：職場におけるバリアフリーの課題（椙山女学園大学高阪教授）」「教育講演2題：①人間工学・作業管理に必要な疫学的な味方　②作業管理と運動」「一般演題」で構成され、4日の懇親会後には「ナイトキャップセッション」も企画されました。「ワークショップ」は今回の大会の目玉となるもので、㈱トーエネックの全面的な協力を得て、約50名の作業者による柱上作業等の見学、及び作業そのものを体験して作業管理を実践し、実習後はディスカッション（座長：名市大井谷教授）で作業管理の課題を科学的に検討され、好評でありました。

第9回産業医・産業看護全国協議会

寺澤　哲郎（東海銀行健康管理センター）

今年で第9回目となる産業医・産業看護全国協議会が、平成11年10月22日（金）・23日（土）の両日、秋深まるみちのく路仙台で開催され、全国から多数の産業医・産業看護職が出席し、活発な交流が行われた。初日は4会場に分かれ、ポスターセッション、各テーマ毎のワークショップが行われ、2日目午前中は、産業医部会と産業看護部会に分かれそれぞれ総会・シンポジウム・座談会が、午後は全体で特別講演とシンポジウムが行われた。2日目午前中の産業医部会企画では、シンポジウム「企業・業種を超えた集団での産業医活動」の中で、当地方会から、歴史の長い愛知県産業医懇談会の活動を私・寺澤が発表し、全国に紹介することができた。本協議会の各企画のテーマでは、「不況・リストラ下における効果的な産業保健活動」「女子の夜勤労働の問題点」「中小零細事業所での産業保健活動」「他の産業保健担当者との連携」「多様化する労働者の健康意識と望まれる健康観」など、現場に即した大変ホットな話題が取り上げられており、非常に内容の濃い聞き応えのあるものであった。その中で、全体シンポジウムでの東大・山崎先生の基調講演は、生活習慣病予防など健康推進のために、「行動変容」をめざすのではなく、「行動変容を可能とするような能力を付与する（enabling）」という新しい戦略を紹介され、今後の産業保健活動の進め方の方向性に示唆を与えられる、大変有意義なものであった。

これからの諸行事予定

第15回産業医・産業看護職・衛生管理担当者のための研修会
日　時：平成12年2月18日（金）　10：00～16：45
場　所：産業技術記念館　大ホール　TEL　052-551-6111
会　費：8,000円（昼食代含む）
事務局：名古屋大学医学部衛生学教室　TEL　052-744-2124

10：00～10：15　開会の挨拶・オリエンテーション
10：15～11：45　講演「女性の社会進出に関する諸問題」
　松下電工健康管理室室長　長井聡里
　座長　愛知医科大学衛生学　渡邊美寿津
12：50～14：10　講演「眼の健康管理」
　金沢医科大学衛生学講師　中石　仁
　座長　松下電工四日市工場産業医　松田　元
14：30～16：30　パネルディスカッション
　「労働安全衛生マネージメントシステム」
　―労働安全衛生活動はどう変わる？―
　座長　井谷　徹（名市大・医・衛生学教授）
　パネリスト　山田四郎（中災防）
　木下勝也（本田技研　鈴鹿）
　吉川勝敏（松下電工人事部）
16：30～16：45　閉会の挨拶

第41回産業精神衛生研究会・第47回職場精神衛生研究会
Ｐ2を参照下さい。

第13回振動障害研究会
日　時：平成12年3月18日（土）　13：30～16：00

場　所：名古屋大学医学部会議室（基礎棟2階、医学部事務室前）
演　題：1．振動障害研究にたずさわって
　　岩田弘敏（岐阜大学医学部衛生学教室）
　　2．諸外国での振動障害の研究と対策
　　山田信也（前名古屋大学医学部公衆衛生学教室）
　　3．21世紀の労働衛生研究戦略について
　　米川善晴（労働省産業医学総合研究所）
世話人　岩田弘敏・井奈波良一・松本忠雄・榊原久孝

第4回職域肺疾患管理研究会
期　日：平成12年3月18日（土）　14：00～16：30
場　所：名大医学部鶴友会館2F大会議室
講　演：1．かぜ症候群と肺炎について
　　宮崎淳一（藤田保健衛生大学第2病院内科）
　　2．成人に対するワクチン接種について
　　ーインフルエンザ・海外派遣者を中心にー
　　宮津光仲（名鉄病院・予防接種センター）
討　論：企業体におけるかぜによる欠勤の実態とその対策
　　＜話題提供＞松浦正江（名古屋鉄道・保健婦）
特別報告：最近の肺結核の発生状況と職域における集団感染事例
　　松本忠雄（江南保健所）
世話人：立川壮一、加藤保夫、柴田英治

地方会理事会

平成11年度第2回理事会
日　時：平成11年6月29日（火）　14：00～15：15
場　所：名古屋大学医学部鶴友会館　2階大会議室
出席者：34名
1．報告事項
(1)事務局からの報告事項（柴田）　(2)本部からの報告事項（竹内）　(3)平成11年度地方会総会・研修会（加藤）
2．協議事項
(1)地方会ニュース第47号（谷脇）　(2)平成11年度地方会学会（竹内）　(3)地方会ホームページ開設（井谷）

平成11年度第3回理事会
日　時：平成11年8月31日（火）　14：00～15：00
場　所：名古屋大学医学部鶴友会館　2階大会議室
出席者：35名
1．報告事項
(1)事務局からの報告事項（柴田）　(2)本部からの報告事項（竹内）　(3)地方会ホームページ（城）
2．協議事項
(1)地方会ニュース第47号（谷脇）　(2)東海地方会学会（竹内）　(3)平成12年度東海地方会総会ならびに研修会（松田）　(4)地方会静岡県担当者推薦（鎌田）

謹賀新年

財団法人　愛知健康増進財団
会　長　安部浩平
理事長　赤塚邦夫
診療所長　小倉幸夫
〒462-0844　名古屋市北区清水1-18-4　TEL(052)951-3331(代)

社団法人　岡崎市医師会公衆衛生センター
岡崎地域産業保健センター
人間ドック・集団健診・臨床検査
〒444-0875　岡崎市竜美西1丁目9番1
TEL　(0564) 52-1572（代表）

財団法人　岐阜県産業保健センター
理事長　籠橋　久衛
診療所長　加藤　保夫
〒507-0801　多治見市東町1丁目9番地の3
TEL(0572)22-0115

医療法人　光生会病院
〒440-0045　豊橋市吾妻町137番地
TEL (0532) 61-3166　FAX (0532) 63-5407

(社福) 聖隷福祉事業団
聖隷健康診断センター
所長　大條　浩
〒430-0906 浜松市住吉2丁目35-8　TEL(053)473-5501

社団法人　瀬戸健康管理センター
理事長　佐藤良寛
診療所長　坪井靖治
〒489-0809　瀬戸市共栄通1丁目48番地
TEL (0561) 82-6194　FAX (0561) 85-2466

医療法人　愛知集団検診協会
愛知健診所
〒496-0048　津島市藤里町2-3-1
TEL　(0567) 26-7328番
FAX　(0567) 26-7994番

労働大臣認可
社団法人　オリエンタル労働衛生協会
会長　鈴木正雄
理事長　高須靖夫
〒464-0850　名古屋市千種区今池一丁目8番4号
TEL　(052) 732-2200

〒453-0813　名古屋市中村区二ツ橋町四ノ四
財団法人　公衆保健協会
TEL(052)481-2161　FAX(052)481-7847

財団法人　芙蓉協会　聖隷沼津第一クリニック
聖隷沼津健康診断センター
所長　中島　容一郎
〒410-8580　沼津市本字下一丁田895-1
TEL(0559)62-9882　FAX(0559)52-1019

(社福) 聖隷福祉事業団
聖隷予防検診センター
所長　臼田多佳夫
〒433-8558 浜松市三方原町3453-1　TEL(053)439-1111

健診健康総合サービス
(財)全日本労働福祉協会東海支部
支部長　菅原　望
〒457-0044 名古屋市南区柵下町2-4　TEL (052) 822-2525

会員の異動

（H11. 6. 1～H11. 10. 30）

新入会 愛知 ①斎藤照代（大同特殊鋼）②吉村友里（大同特殊鋼）③早野順一郎（名市大医第3内科）④森下ともみ（近畿健康管理センター名古屋）⑤茂木順子（中部労災病院健診センター）⑥渡邊 悟（大同病院）⑦金田友之（刈谷記念病院）
静岡 ①宮本みゆき（トッパンエレクトロニクス富士）②土屋裕一郎（静岡県立総合病院）③尾藤育子（丸山病院）④川嶋修司（聖隷予防検診センター）⑤斉藤直子（ＮＴＴ伊豆逓信病院）⑥高松 幹夫（済生会総合病院）⑦中島康雄（浜松労災病院）
三重 ①酒井秀精（築港病院）②林志津子（三重県総務局職員課福利厚生室）③石濱信之（三重県健康福祉部健康対策課）

転 入 愛知 ①荻原隆二（長寿科学振興財団）……関東地方会より

退 会 愛知 ①小川裕子（東邦ガス）②林 貴範③瀧田資也（INAX）④浅田恭範（半田市医師会臨床検査センター）⑤鷲野昌夫
岐阜 ①高井昭裕（大野保健所）
三重 ①村瀬さな子（三重大医公衛）
静岡 ①加藤 力（聖隷健診センター）②宮崎浄弐

転 出 静岡 ①平 貢秀（ベネッセコーポレーション）……関東地方会へ

編集後記

地方会ニュース編集委員会のメンバーが入れ替わられて顔ぶれが変わり、新たな気持ちで取り組んでいます。

編集委員会の活動をしている中で、産業看護職の会員が少ないとよくいわれます。産業看護職は産業医と比較し、業務の裁量範囲が狭く、学会活動に参加しにくいということがあります。しかし、今後、労働者の健康の保持増進に看護の視点で支援していくことをよりいっそう進めるためには、法律上に、産業看護の役割や職務、配置等の基準について明確な位置づけが条文化されることが重要だと言われています。そのために、産業看護職の専門性や必要性をアピールしなければならないと思います。まずは学会発表の共同発表者としてや地方会ニュースの原稿依頼をするために、会員になってもらうということで少しずつ仲間を増やしています。

微力ですが、今後も任された範囲でできる限り、貢献したいと思います。（巽あさみ）

次回発行　平成12年5月1日
編集責任者　谷脇弘茂（藤田保衛大）

編集委員（五十音順）

浅井八多美（ヤマハ）	市原 学（名大）
大久保浩司（東芝四日市）	加藤保夫（岐阜県産業保健センター）
後藤円治郎（住友軽金属）	五藤雅博（旭労災病院）
後藤義明（ブラザー工業）	榊原久孝（名大）
高柳泰世（本郷眼科）	城 憲秀（名市大）
巽あさみ（藤田保衛大）	寺澤哲郎（東海銀行）
長岡 芳（藤田保衛大）	松本忠雄（江南保健所）
武藤繁貴（聖隷健診センター）	山田琢之（愛知医大）
吉田 勉（藤田保衛大）	渡邊美寿津（愛知医大）

謹賀新年

平成十二年元旦

GHL 社団法人 加茂医師会立
総合保健センター
〒505-0046 美濃加茂市西町7丁目169番地
TEL（0574）25-5324 FAX（0574）25-0480

医療法人 九愛会
中京サテライトクリニック
理事長 宮嶋 忍
〒470-1121 愛知県豊明市西川町島原6番地の7
TEL（0562）93-8225㈹ FAX（0562）93-0938

（医）豊昌会
豊田健康管理クリニック
理事長 加藤昌平
〒473-0907 豊田市竜神町新生155番地 TEL(0565)27-5550 FAX(0565)27-5036

医療法人 名翔会
名古屋セントラルクリニック
〒457-0047 名古屋市南区城下町3丁目14番地
TEL(052)821-0900(代) FAX(052)824-0655

医療法人
日本生命ヘルスコンサルタント
所長 夏田洋幹
〒450-0003 名古屋市中村区名駅南1-27-2 日本生命笹島ビル6F
TEL(052)582-0751 FAX(052)582-6968

社団法人
半田市医師会健康管理センター
所長 榊原幹雄
〒475-8511 半田市神田町1-1 TEL(0569)27-7881

㈹ 宏潤会 大同病院
理事長 石原 晃
院長 西脇 洋
〒457-8511 名古屋市南区白水町9番地 TEL（052）611-6261

㈶東海検診センター
理事長 宮崎 勝治
診療所長 斉藤 俊二
〒410-0003 沼津市新沢田町8-7
TEL（0559）22-1157
FAX（0559）23-5078

名古屋市医師会協同組合
名古屋市医師会健診センター
理事長 高澤嘉人
〒461-0004 名古屋市東区葵一丁目4番38号
TEL（052）937-8460 FAX（052）937-7893

NOH Nissin Oride Hospital
医療法人 大医会
日進おりど病院
〒470-0115 日進市折戸町西田面110番地
TEL 05617（3）7771 FAX（3）6159

㈶ 日本予防医学協会 名古屋出張所
健康フォーラム名古屋談話室
〒461-0002 名古屋市東区代官町39-18
TEL（052）931-0526・FAX（052）932-7092

財団法人 三河保健予防協会
理事長 由利卓也
〒442-0013 豊川市大堀町77番地 TEL0533-86-1515